

発刊にあたって

米の需要は依然として減少傾向にあり、米に係わる制度が生産調整から戸別所得補償制度に大きく転換したものの、過剰作付けの解消が進まないため需給状況が緩和基調で推移し、価格水準は低迷が続いております。

この冊子の編集作業が行われている最中の2011年（平23）3月11日、宮城県沖を震源とするM9.0という巨大地震が発生し、北海道から千葉県に至る太平洋岸では未曾有の大津波に見舞われ、少なくとも2万畝以上の水田が被災し、海水流入による塩害や漂流物・土砂などの流入、水田そのものの地割れ、液状化、隆起や陥没などの被害があり、さらに農道、用排水路、揚水機場などへの被害、それに東京電力福島第一原子力発電所の事故による放射性物質の飛散に伴う作物や土壤汚染地域の拡大など、本年や来年以降の水田耕作がどの程度できるかどうか心配されます。

このような状況の中で、本年の米穀年度の供給には問題無いとする見方が一般的ですが、来季の米不足が心配されています。現に一部産地の米価格が上昇してきたり、備蓄米の動向など不確実な状況が生まれてきており、米をめぐる情勢は混沌としてきています。

さて北海道米は、「優良米早期開発試験プロジェクト」が発足し30年目を迎え着実にその食味レベルをあげてきており、2010年産（平22）の「ななつぼし」、作付けがまだ少ないため参考品種としての「ゆめぴりか」が、日本穀物検定協会の食味ランクで北海道初の「特A」ランクに評価されるまでになり、本州のブランド米と肩を並べる水準となりました。また、「きらら397」を代表とする業務用米の供給地としても評価されています。北海道内のお米の食率も良食味品種の「ほしのゆめ」「ななつぼし」「おぼろづき」「ふっくりんこ」「ゆめぴりか」の開発によりほぼ80%に達するなど、北海道内においても道産米に対し高い評価を得るまでになってきました。

しかしながら、2009年（平21）の冷害、2010年（平22）のいもち病の多発のように、安定供給を図る上ではまだまだ総合的な技術対策を実行することが望まれています。

本会では、北海道や道立農業試験場の協力を受けて、北海道稲作の技術書・教科書ともいうべき「北海道の米づくり」の冊子を1989年（平1）、2001年（平13）と刊行し稲作技術の指導者等に広く活用されてきました。

その後10年が経過し、米をめぐる情勢も変化し、新品種・新技術も開発されたこともあり、内容を見直して改訂することになり、編集発行の運びとなりました。

作成に当たりましたは、北海道農政部食の安全推進局農産振興課、道総研中央農業試験場のご指導により章立てと執筆者の推薦、編集方針を決めていただき、北海道農政部の稲作関係の職員や普及指導員、道総研の研究員諸氏に執筆いただきました。写真や図表を多用していただき、内容の豊富なものになったと自負いたしております。ご執筆いただいた方々のご苦勞に深く感謝の意を表します。

良質で食味の良い米の安定生産と生産費低減に向けて本書を活用いただくことで、北海道米の評価をさらに高め、稲作経営の向上に寄与できるものと確信しております。

社団法人 北海道米麦改良協会
会長理事 佐藤俊彰